

LAYER  
X  
MASKING  
\*\*\*  
FAN BOOK

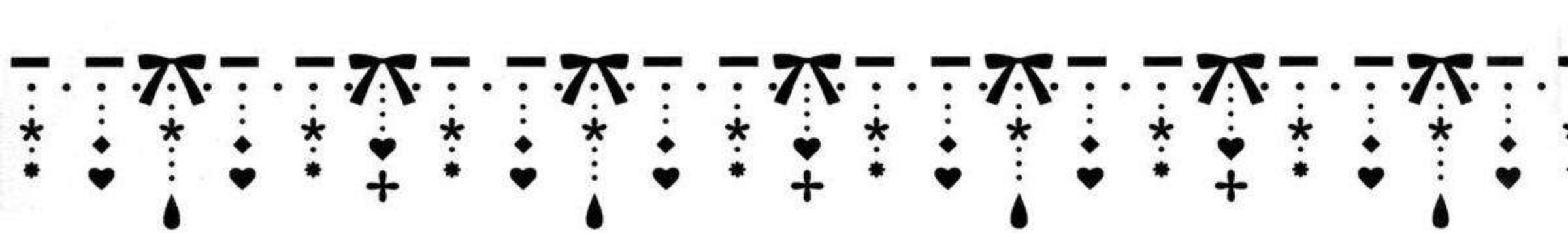
ふたなり  
って噂は本当ですか!?

レトロの  
パンダの

を  
ブルブルが

を  
ボーイズ  
ボーイと

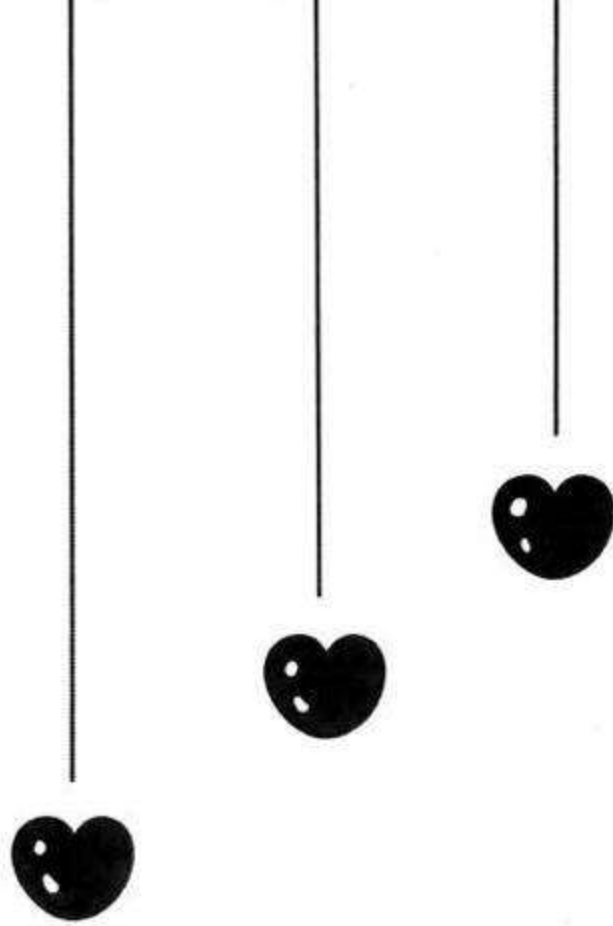
DOJIN  
R18



# ! Attention !

注：この本はふたなりレイマス本です。生えてます。

レイに生えたパターン、ますきに生えたパターン、両方に生えたパターンと  
様々な組み合わせがお楽しみ頂けますが、  
どのパターンでも全て受け攻め概念は**レイ×ますき左右固定**となっております。



# Contents

**Novel** みこと  
温泉旅行は計画的に 05-11  
—ふたなりレイ×ますき

**Comic** すう  
XXX dizzy 13-30  
—ふたなりレイ×ふたなりますき

**Comic** しゅう  
Teasing 31-38  
—レイ×ふたなりますき



温泉旅行は計画的に  
みごと

温泉旅行は計画的に

みこと

ゴールドデンウィーク。学校は休み。でかいライブを終えてバンド練習も暫く休み。纏まった休みは久し振り、あたしとその恋人であるレイはその休みを利用して温泉旅館に来ていた。

「あー、いい湯だった」

以前、この場所に来た時と同じ「睡蓮」の間が今日のあたし達の部屋だ。ご自慢の壺湯を堪能し浴衣を着て部屋に戻ると、ちょうど内風呂から上がったらしいレイが持参したドライヤーで髪を乾かしていた。

「お帰り、ますき。…あ、髪乾かしてないでしょう？」  
「げっ、バレたか」

レイはやたら目敏い。髪の毛なんかドライヤーで乾かさなくたって自然にすぐ乾くというのに、絶対に乾かせと言ってくる。

「もー、傷んじゃうでしょ。ほら、こっち来て？」  
「へいへい…」

乾かしたてでサラサラのレイの髪。あたしとは毛の質が違うから、あたしがこのドライヤーで髪を乾かしたところでこんな指通りがない髪にはならないんだけどな。

しゃがんだあたしの後ろ側に膝立ちになって右手でドライヤーを揺らしながら温風を当て、左手で髪を整えられる。多分レイはこうするのが好きなんだろう、温風が吐き出される音の合間に鼻歌が聴こえた。何が楽しくて他人の髪なんか乾かしているのか、以前聞いたなら「何か世話焼きたいから」って真顔で返されて、聞いたこっちが恥ずかしくなっちゃったんだよな。

「髪の毛、いい匂い。これ備え付けのシャンプー？」

「んあ？そうだけど」

「何の匂いだろう…」

「…っ、おい…」

頭のとっぺんの匂いを嗅がれては流石に抵抗する。いや、ちゃんと頭洗ったけど何か…、なんて思っていたらドライヤーの音が止まり後ろから思い切り抱き締められた。突然のスキンシップに思わず固まってしまう。

「れ、レイ…？」

「ん…？」

すう、と息を吸う音が耳元で響き、びくっと震える肩。条件反射のようなその反応に恥ずかしさが募り頬が熱くなってくる。

「いい匂いだし、浴衣姿が綺麗だし…。そんなますきを独り占め出来て、幸せ」

「ん…」

あたしが耳が弱点だと知っている癖に右耳に直接囁き込まれる。ぞくりと背筋が震え首の後ろがぞわぞわと粟立つのを自覚した。

薄い浴衣越しに感じるレイの体温と鼓動。密着した背中に当たる感触。まさかこいつ…。

「…おい、レイ…」

「あ、ばれた？」

「バレバレだよ！何勃たせてんだ！」

…世の中にはレイのように女性の体に男性器が『生えている』第三の性の人間がいる。その数はアルビノと同数だとか、それよりも多いとか少ないだとか。実際あたしもそのタイプに逢うのはレイが初めてだった。都市伝説だと思っていたがレイに誘われるが儘に共にした夜、全裸になった彼女に想定していなかったものが『ついてた』から気が動転してしまっただけで拒絶してしまいレイを傷付けちゃったのは今や笑い話になっている。

「だって…浴衣姿だよ？勃起しない方が可笑しいよ、自覚して」  
「何であたしが怒られてんだ！」

くるりと振り返ると浴衣越しにくっきりとその存在を主張しているそれに目が釘付けになった。どんだけムラムラしてんだよ…！

「ねえ、布団行こう？ますきに触りたくなっちゃった」

頬を撫でられ返事をする前に唇を塞がれる。唇全体を覆うようにされては開く事も叶わず一瞬息を止めた。それを察知したのか、レイが指先をあたしの耳孔に差し込み擦るように撫でるものだから、堪らず眉を寄せて肩を竦めてしまう。

びくっと震える体。上掛けを脱がされ、首をするりと撫で上げられ塞がった唇からくぐもった嬌声が溢れた。

脇に腕を差し込まれ上に引き上げられ無理矢理立たされる。そして唇を合わせたまま纏れるように敷かれた布団の上へ移動させられそのまま押し倒された。

「んむ…っ、んん！んー！」

「…っは、…なあに？」

「なあに？じゃねえ！がつつきすぎだー！」

「言ったでしょ、ますきに触りたくて仕方ないの」

長い髪を耳に掛け、レイは妖艶に微笑う。きゅんと腰の奥が疼いて、自分の浅ましさを嫌ってほど自覚した。

レイの下腹部に存在するそれを浴衣越しに腹部へと押し付けられる。はつきりと伝わる硬さに、生唾を飲み込んだ。

「…デカくし過ぎ」

「制御出来ないんだもん」

「…いいけど、何回もすんなよ…？」

「…」

「目エ逸らすなっ」

あたしは他の奴とこういう事をした事が無いから比較対象がいなのだ、レイは所謂絶倫というやつらしい。らしいというのも、毎回レイが満足するのにやけに回数が必要で、それが普通なのかどうか、漫画やネットを読んで調べてみた結果がどうしても『絶倫』という単語に行き着くわけで。お前絶倫なのかよって尋ねた時、レイはこの世の終わりか位の表情で「どこでそんな言葉覚えてきたの…？お

嬢様なのに…」なんて嘆くからこいつアホなのかなって思ったのを今でも覚えてる。

話が逸れたが兎に角レイは世に言うところの絶倫らしい。だからこいつが満足するまで付き合っていたら、あたしの腰が死ぬ羽目になるのだ。明日の朝には此処を出ないといけなの、腰が死んでいたら悲惨である事は火を見るより明らか。何が何でもそれは避けたい。

「もう…ムード考えてよ」

「お前が言うなっ」

「はいはい、判りました。四回ね」

「はあ？馬鹿言うなよ！二回だ！」

「仕方ない…三回で手を打とう」

「だから二回だって…っ、っん…！」

浴衣越しに胸の突起をピンポイントで触られ油断していた為声が漏れてしまった。それに逸早く気付き、にこ、とレイが笑う。

「ますき…下着、着けてないの？」

「…」

「着けてないよね、だってここほら…勃ってる…」

「ん、ん…っ」

指先でかりかり、と浴衣の布を引っ掻く。その内側には勿論あたしの胸の突起がある。視線を向けてみれば確かに二つの小さな尖りが出来ていて、恥ずかしくなり直ぐに頭を元の位置へと戻した。

「可愛い。もっと触ってっってお強請りしてる」

「んっ、あ…！」

「どうして欲しいのかな、こう？」

「んあッ…」

二本の指で突起を布越しに摘まれると途端に普段は絶対に出さない高い声が簡単に出てしまう。それが心底恥ずかしくて右手で口元を覆うけれど、直ぐに左手でそれを退けられついでに布団に括り付けられてしまった。

「だめだよ、ますき。声聞かせて？」

「んっ…んっ」

「ふふ…舐めて欲しいって言ってる」

「あ…っ…っ」

「…いい匂い」

「ひ、あッ」

首元に顔を埋めるレイの乾かしたての髪が肌に触れ擦ったさに身動ぐと、浴衣の裾がひらりと捲れ足が太腿まで露わになる。レイはそのまま鎖骨の辺りまで啄むように口付けを降ろしながら襟元を片手で開きあたしの胸を外気に曝け出させた。

「綺麗…」

「…っ、あんま見るなよ」

「何で？見るよ。好きな人の裸は見たいじゃん」

恥ずかしい事を平気で言っただけのレイの唇がとうとう尖りを捉えてちゅうつと音を立てて吸い始め、あたしの体はびくつと跳ねる。腰の奥がきゅんと疼いて堪らず太腿同士を擦り合わせると、それに気付いたレイがすかさずあたしの両足を思い切り開いた。そして閉じてしまわぬよう脚の間にすりと体を滑り込ませる。股座の屹立が股に当たる。熱の塊が、レイの気持ちの高ぶりを真っ直ぐに伝えて来た。

乳房を掌で覆い指先に力を加えて揉みしだかれる。そうしているうちにも熱い舌は突起を擦り、益々腰の奥がきゅんと鳴いた。

「あっ…んん、あ…」

「ん…、私ね、ますきの胸大好き。ずっと舐めていられる」

「あ、あっ…んん…」

「胸だけでイケるか試してもいい？」

「はっ…？無理だって、そんなん…！」

「やってみなきゃ判らないじゃない。ね、いいでしょ？」

「あんっ！…囁んだまま喋んな…ッ」

とんでもない提案をしてきたレイは本気で突起だけで絶頂を迎え

させるつもりなのか舌先を細かく揺らしたりちゅうつと音をたてて吸い付いたりもう片方の突起を指で摘んで引っ張ったりと好き勝手愛撫し始める。その度にあたしの背筋がびりびりと震えるし下腹部がきゅうきゅうと疼きまくって、喘ぎを我慢するのが難しくなり荒い息と共にひっきりなしに嬌声をあげてしまう。

「ますき、可愛いね…ますき…」

「は、あっ、あ…っ」

「…だめ、我慢出来ない…」

「は…？…んあッ」

唸るような独り言の直後に胸を触っていた手があたしの下腹部まで滑り降りて行き下着の中に手を差し込まれた。

「凄く濡れてる…ああもう、可愛い…」

「あっ、ん、やあッ」

「胸を触ってたら…ここ触りたくなっちゃった」

「あんッ…あ、あッ」

レイから言い出した挑戦はレイ自らが棄権という形で幕を下ろした。ベースの弦を弾く指があたしの最も感じる場所を引っ掻いたので今までの中で一番高い声が唇から溢れ、それを聞いたレイがこくりと唾を嚥下した。

「はあ…ますきの声堪んない…腰にくる」

「ひやう、あっ…あッ、あ！」

「ねえ、イかせてもいい？」

「あ、あ、あッ、ああ…っ」

「ますき、ココ好きだよ。本当可愛い…もっとな声聞かせて？」

陰核を觸る手の動きが早くなり、自分の蜜壺から溢れた液体でぐちゃぐちゃに濡れた指によって今まさに高みに引き上げられようとしていた。目の前がチカチカと瞬いて、足の指先がびりりと甘く痺れそれが腰へと這い上がって。

「やっ…イキそ…っ」  
「ん…イって？ますき…」  
「あっ、イク、イク…ッ！」

体の奥が熱くどくりと震え、びくんっと全身が激しく跳ね上がる。酸素が足りなくなり浅い呼吸を繰り返していると、いつの間にかあたしの下着を取り払ったレイが浴衣を脱ぎ捨て自らの下着に手をかけていた。

「はあ…、ますきの感じてる顔ってホント堪えないだよ。ほら…もうこんなになっちゃった…」

レイの視線の先を辿れば、そこには想像以上に聳え立つレイの陰茎が存在していた。

女の顔。胸は勿論膨らんでいるし、陰核は無いものの花卉と蜜口は在る。本来陰核のある場所から『生えた』陰茎は血管が浮き出て今にも爆発しそうな程に昂っていた。よく見れば先端から透明の液体が溢れ今にも零れ落ちそうになっている。

「挿れたい…」  
「ん、あっ…」

熱に浮かされたような声でそう呟くも、蜜口の中に入れられたのは彼女の指だった。肉を割り、蜜の滑りを利用して一気に奥へと押し込まれ、また入り口付近へと戻っていく。

とくとくとくとくとく。鼓動が逸る。体が期待している。今から途方もない快樂の海へ連れ出されるのだと。

指が二本に増やされそれらが奥を突いていくと、その先の口がきゆうんと疼いた。

「濡れてるし…もういいよね？」  
「あっ、んあっ」

入り口付近の肉を二本の指が押し広げていく。其処からどろりと液体が溢れ出た感触がしてぞくぞくと背中に震えが走った。きっと

浴衣はもう蜜まみれだろう…。

濡れそぼったその箇所を押し当てられた熱い塊。それが肉を割いて内壁を押し広げながらゆっくりと奥へ進む感覚がはつきりと判る。

耳元に唇を寄せられる。荒いレイの息遣い。それだけでも堪らないのに、わざと耳孔に息を吹き掛けられ体が大きくびくんっと跳ねた。

「はあ…、ますきの中、熱い…」

「ひ、あっ、ひやうっ…」

「んっ、…きつい…」

「やっ、まだ、動くなよ…っ」

「ええ…？生殺しじゃん…、いいでしょ？…ほらっ」

「ひやあんっ、あっ」

「あは…あーもう…可愛い…」

あたし達の体の相性は抜群で、レイの陰茎の長さや太さはあたしの膣内で快感を得るのにちょうどいいものであり、止まっていようがゆっくり動いていようが早く抽送されようが全て快感へと繋がってしまう。だから、こんなはしたない声を早々にあげてしまう。

可愛い、と言われて奥が疼く。快感を期待して、内壁がしっかりとレイの棹を啜え込んだ。

「…動くよ…」

その言葉の直後だった。

入り口まで引かれたそれが、最奥へと一気に押し込まれ。ごっん、と何かにぶつかる感触。快感を欲して降りてきた子宮の口。目の前が白く霞むけれど、またすぐに色を取り戻す。

「あっ、あッや、やあっ」

「…はあ…、は…、…可愛い…」

鼓膜を震わせる甘い声。何千人、何万人とこいつの歌声に魅了されているけれど、その中の誰一人ですら知ることは無いんだ…レイヤの、和奏レイの感じた声は、聞いた人の理性を即座に奪ってしまう程のものなんだって。



奥をノックするかのように突かれ、それだけで途方もない快楽に襲われてしまうあたしはただはしたなく喘ぐしか出来なくて。帯を腰に巻いただけで胸も足も丸出しという状態で、ただひたすらに与えられる衝動に身を任せるしか無く。

「いやっ…イク、イクイク…！」

「うん…、いいよ…！…ん…っ」

「ふああっ！やっ、あっ、ん、んっ」

「イって…ますき…、ん…好きだよ…イクとこ見せて」

「ああっ、あっ、レイ、レ、イ、っ、あああっ」

なかでの性感帯を抉るように突き上げられ、びくんっと大きく全身が震えて絶頂に達した。快感の波は高く中々落ち着かない。長い余韻に浸っている間、レイはあたしの額や頬にキスをたくさん贈ってくれていた。余裕がある。それもその筈で、彼女のそれはまだ吐精を迎えていない。

「はあ…っ、はあ……っ」

「気持ち良さそう…ますき…可愛い」

「は、は……」

「イク時の顔も声も本当に可愛い、大好きだよ。ますき…」

「んあっ！」

未だ余韻を引き摺っている最中にレイの猛りが槌のように奥を突いた。がつんという衝撃に脳が揺れる。

「ああっ、あ、あんっ、あっ」

「はあ…きつ…」

「ひ、アッ、あ、あ！レイ…っ、あっ、そんな、突くな、よ…お…！」

「無理だよ。可愛い顔見てじっとしてろって言うの？」

「ふああんっ、あっ、やだっ、やっ、やあんっ」

こうなるともうあたしは自分を止められなくなる。声を我慢する事も出来ず、開きっぱなしの唇の端からは唾液が溢れて顎を伝う。それをレイは舌で拭い、唇を覆うように口付ける。ちゅる、と音を立て

て唇の周りの唾液を吸われたただけであたしの腰の奥は淫らに鳴いた。

「んっ…、締まる…」

「は、あっ、あっ」

がつん、と一番奥を突かれ目の前がチカチカと瞬いた。すぐに色を取り戻すけれど、快楽の波は押し寄せるばかりで引く事を知らない。少し我慢してね、と断りを入れてからレイはあたしの腰を掴んで抽送を開始した。壁と棹が直接擦れ合う感覚と、先端が最奥に何度も当たる衝撃に短い嬌声が吐息と混じり合って唇から零れ落ちていく。

堪らない。こんなに強い快感を何度も何度も与えられては…身が保たない。

「あっ、あ、あ、んっ、レイ、れ…いっ」

「ん…、ごめんね、もうちよっとだから…っ」

「ああんっ！むり、むりい…っ」

「ごめん、ますき…っ！本当にごめんね…っ」

「ひあん！あ、あっ、あんっ！そこっ、やあ…！」

「く…っ、きつ…っ」

「れい、れいっ、あんっ、やらあ…ッ！や、そこお、やら、やっ、やんっ…！」

「もお、むりい…！」

「もう少しだから…っ」

あたしの理性はどうにぶっ飛んでいて、呂律も回り切らずにはしたない声をひっきりなしにあげてしまう。そんなあたしの様子に煽られたのか、レイの陰茎はこれ以上ない程に怒張し猛った。

「どこが…っ、もう少しだ…！もっとなでかくしてんじゃねえ…っ、あ、んあっ」

「だってますきが可愛すぎるから…」

「あっ、ん、あ、あんっ」

「ますき、ますき…可愛い、大好き…っ」

「ひあっ♡あっ…らめ、そこ…っ、弄るのらめえ！」

「はあ…可愛い…こんなに大きくして…、やらしいね…」

花卉の芽を親指で弄られあつという間に快樂の頂上へと引き上げられてしまう。情けなくも悲鳴に似た声をあげながらあたしは必死にレイにしがみついた。

そんなあたしの耳元で可愛いと囁くレイ。耳朶を甘噛みされては堪らずに高くはしたくない声をあげてしまつて。それでまた可愛いと囁かれる。終わり無きエクスタシーに恐怖すら感じてしまう。

「や、やだっ、いくのいや……」

「どうして……？ん……っ、ますき……イっていいんだよう？」

「一緒に、レイと一緒にいきたい……っ、あっ、やっ、それだめだつてば……！」

「……っ、ああもう……可愛すぎてどうしよう……！」

「ひゃあんっ、あんっ♡……や、ああ、イっちゃう……！」

「一緒にイこう……ますき……っ……」

「いく、いく、レイ……れい……れい……っ！……ふああんっ♡♡」

腰の奥に熱い液をぶつけられている感覚。それと同時に、どくんと何かが弾けて全身が大きく跳ね上がる。長い長い余韻。びくんびくんと何度も跳ね上がるあたしの躰。レイの男性器からびゅくびゅくと出続ける、ただの液体。それがあたしの子宮口に注がれる。

本来ならこれが受精し命が宿るきっかけになるのだが、どうやら第三の性は種を生む力は弱い。その代わり卵の力も弱い。どちらの器も持っているのに、その機能は男性、女性の半分以下だという。成人してからホルモン治療をして、種を強化するか卵を強化するかを本人が選ぶらしい。

弱いと言つても力が皆無という訳ではないので確実に妊娠しないかと言えれば答えはノーである。

……と蘊蓄を垂れている間にレイのそれはあたしの中で完全に硬さを取り戻していた。復活が早すぎる。

「レイ、待て……。ちよつと休憩……」

「何言ってるの？あんなに可愛く喘いで煽った癖に」

「煽ってねえ……んっ♡……おい！奥を突くな！」

「可愛い声……もつと聞きたい」

「あっ……あ、ああ……！」

最初にした約束は何処へやら。

結局この後も散々啼かされ、諸々落ち着いたのは朝方で。夜通し繋がって喘いでいたあたしの喉と腰が使い物にならず、朝一のチェックアウトを昼まで伸ばしてもらおう羽目になった。声がガラガラになっているあたしに風邪でも引いたのかと心配をしてくれる双子の女将さんに、居た堪れない気持ちになったのは言うまでもない。

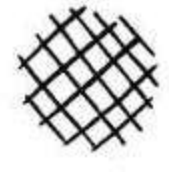
温泉旅行は、計画的に。じゃないととんでもない目に遇うからな！

完

あなたならどう思うか？

スタートアップコミュニティ

あひまのあひま



XXX  
KISS X3

dizzy

すう

ここ

いつものえっちに  
刺激が欲しくて

凄い...!  
本当に生えたよ!

アレが生える  
ふしぎなくすりを  
飲みました

うわ、マジか...

2時間くらいで  
元に戻るし

赤ちゃんが出来る  
心配もないんだって

ご都合主義  
かよ!?

ちん  
ちん  
ん!!

これが...  
男の...アレ...  
はじめて見た...

な、なんか...

なんだかちよほど  
恥ずかしいね

レイトのおたこの  
違くねえか!?

まじ  
まじ

ゴクゴク...









私の胸が  
いいの...?

自分にも胸ある...!!

べ、別にいいだろ！  
お前解ってねえなあ！

レイの胸は女のあたし  
から見ても触りたく  
なるくらい綺麗だし！

自分の胸はただの脂肪...!!  
人の胸はちと違うんだよ!!

ダメなんて  
言っていないよ、  
嬉しい

これで  
いいのかな...?

い...  
い...

...ちよつと  
恥ずかしいね？

おいおいおい、  
柔らかいなあ!!

い...  
い...  
い...



めちやくちや  
気持ちい...

何だコレ天国...?

は...

あ...

い...  
い...  
い...  
い...  
い...

い...





やだっ、ちよ、舐めんな！汚いだろ！？

まさきに汚い場所なんてないよ

むり…っ♡

さきつちよ、そんな…っ、吸われたら…っ♡

で、でちゃ…



やつ、ちよ、もっ…吸うな…っ

イツてる…っ、イツてるからあつ…♡



は…は…

おえ…

…に、苦い…しかも喉にかさばる…

何で飲んだんだよ！

だってますきのだもの、ちやんと味わってみたくて…

不味い…でも不味いものは



それより、  
ねえますき…  
まだいけるよね？

私もますきと一緒に  
気持ち良くなりたいな…

あっ…  
ちよ、れい…っ

な、に、して…っ



あ、れいのと、あたしの…  
いっしょ、に…っ？

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

ちゅっ♡  
ちゅっ♡



ねえもつと  
蕩けた顔を見せて？

もつと甘い声  
で啼いて？

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

きもちいい？

こうされるの  
きもちいい？



…ああ、もう…  
たまんないな…

んっ♡

はぁ



はあ...っ  
ますきの感じてる顔  
見てたら

私もすぐ  
イツちやいそうだよ



お願いますき、  
私と一緒にイツて？

んっ...♥あ...っ、  
イ、きそ...っ

ねえ、イツて...?  
ますき、お願い、  
ほら...

私と一緒に  
イツてよ...っ



んっ...♥あ...っ、  
イ、きそ...っ

ねえ、イツて...?  
ますき、お願い、  
ほら...

私と一緒に  
イツてよ...っ





はっ!?

やだ...っ、それ、怖...ッ

キリッ

キリッ

はっ!

ちゃんとなんて濡れてるよ?

そういう問題じゃなくて...



欲しい...けどっ、いつもの指より何倍も太い...

あ...っ

こんなおっきいの、本当に挿入んのか...?

キレイな顔して、な...ッ、エグいモジッ、持ってやがるだ



うひゃあ

あ...っ



あ...っ

キリッ

何...ッ

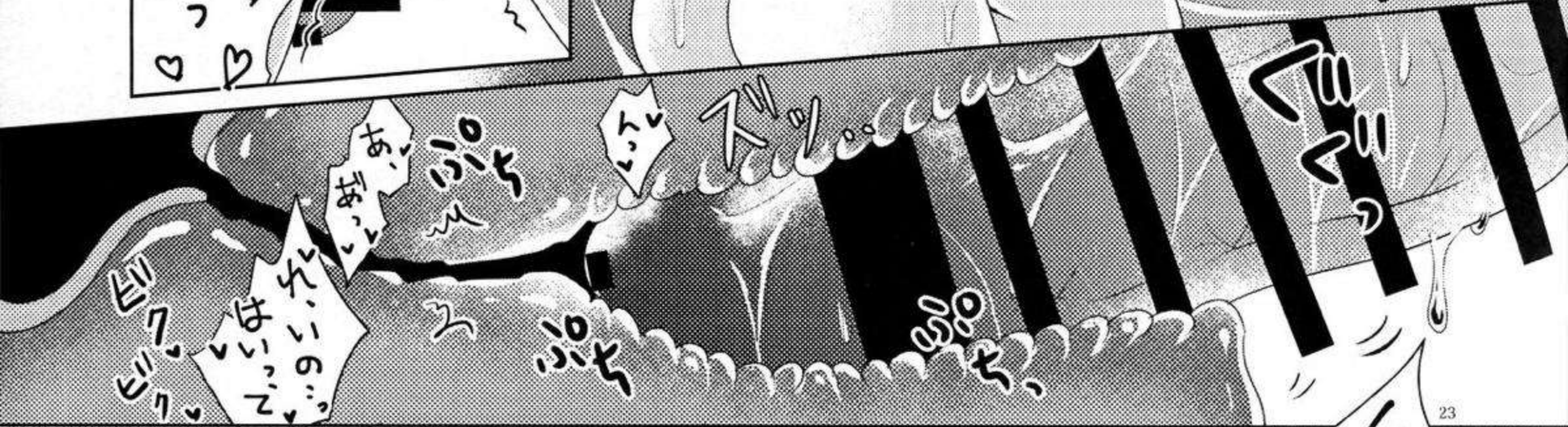
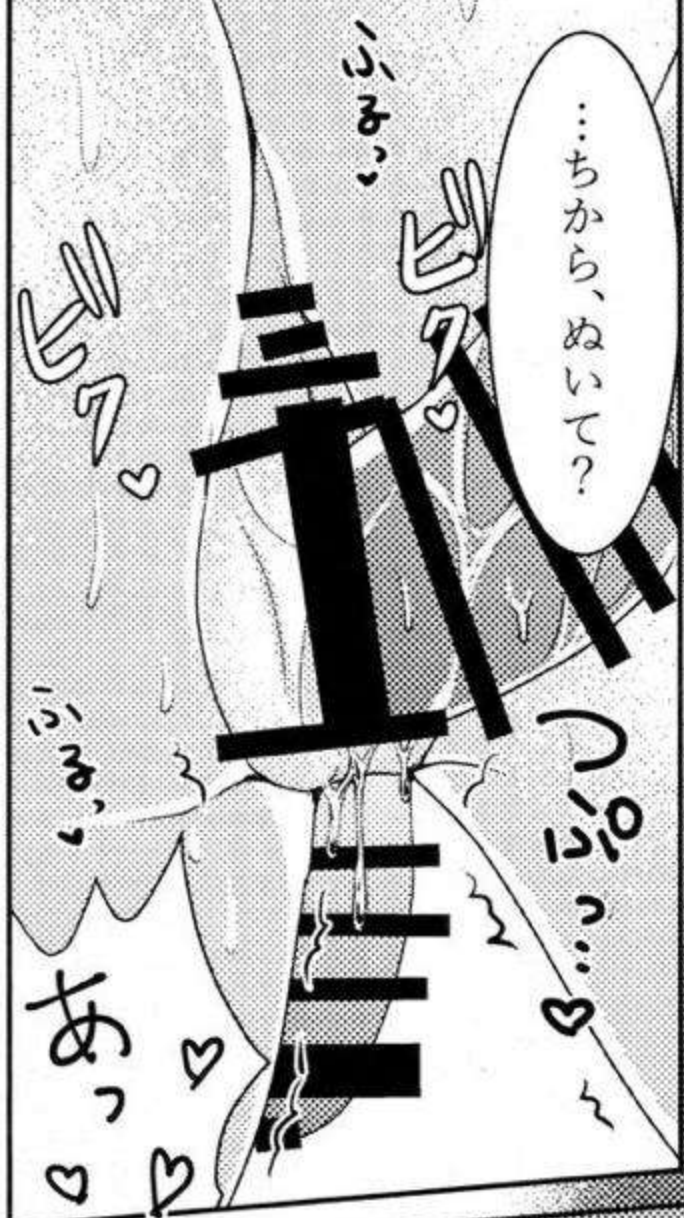
ちよっ…、  
こんな体勢…ッ

わああ

こんなの恥ずかしい  
とこが丸見え  
じゃねえか…っ

でも、この方がすんなり  
挿入らしいから…

…ちから、ぬいて？





...ああ...きもちいい...

あつたかい... ますますに包まれてるみたい...

そんな...っ、じつくり 味わうようにされたら...っ





…うれ…しい…

…わたしね、  
ずっとますきと  
こうなりたかったんだ…



はー…♡

おあ…♡

きゅん♡♡

ますきと  
いちばん深い  
ところで、  
繋がって  
みたかったの

…ちゃんと心で  
繋がれてるってこと  
解ってるの…  
でもね…、  
こうして身体でも

きゅん♡♡  
きゅん♡♡  
きゅん♡♡



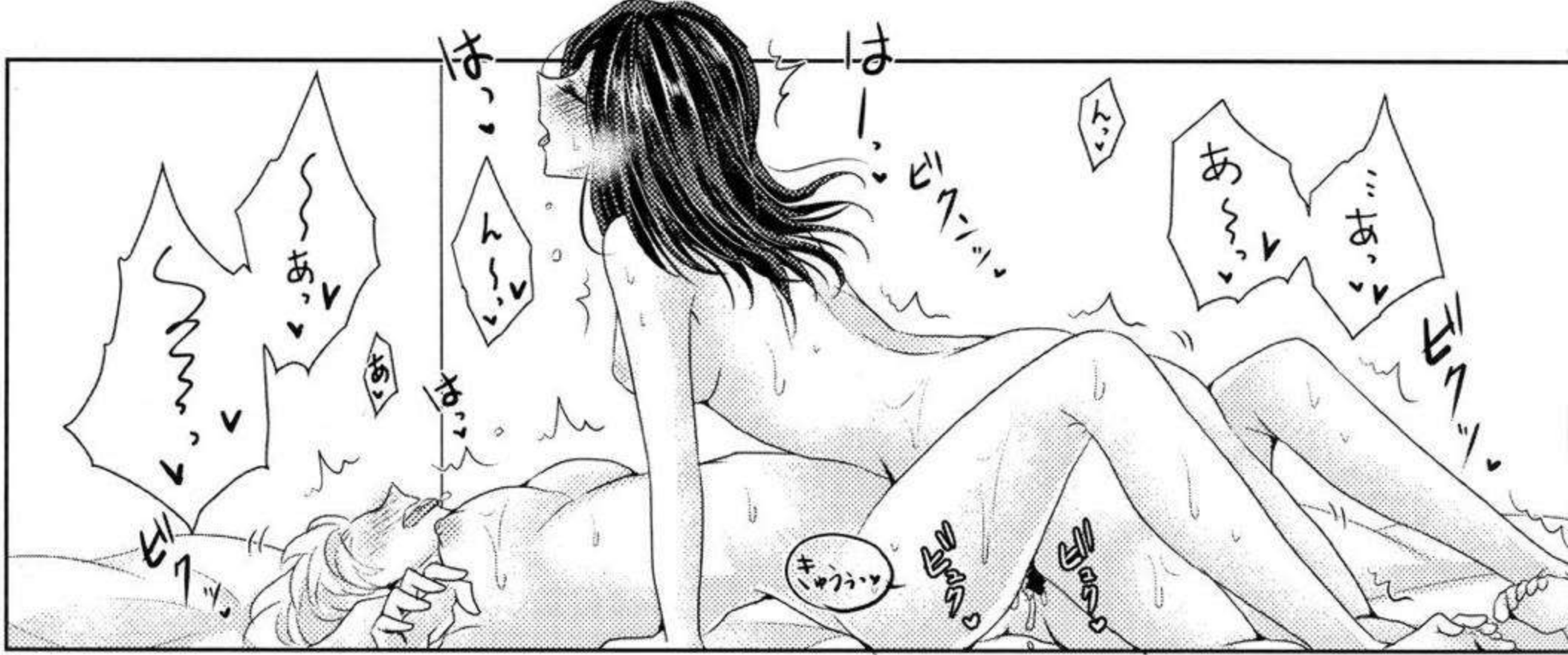


…もう、そんな事  
言われたら歯止め効かなく  
なっちゃうじゃない…っ

んっ…♥奥の  
赤ちゃん部屋、  
とんとんすると  
きゅうって締まる…♥

ん…っ♥  
凄…っ♥  
腰…止まらな…っ







好きにしろよ

…つたく、  
しょうがねえなあ…

はっ…♡



…もすこし、  
このまま…

はあっ…♡♡

…だめ、かな？



…っ、  
ますき、  
大好きだよ

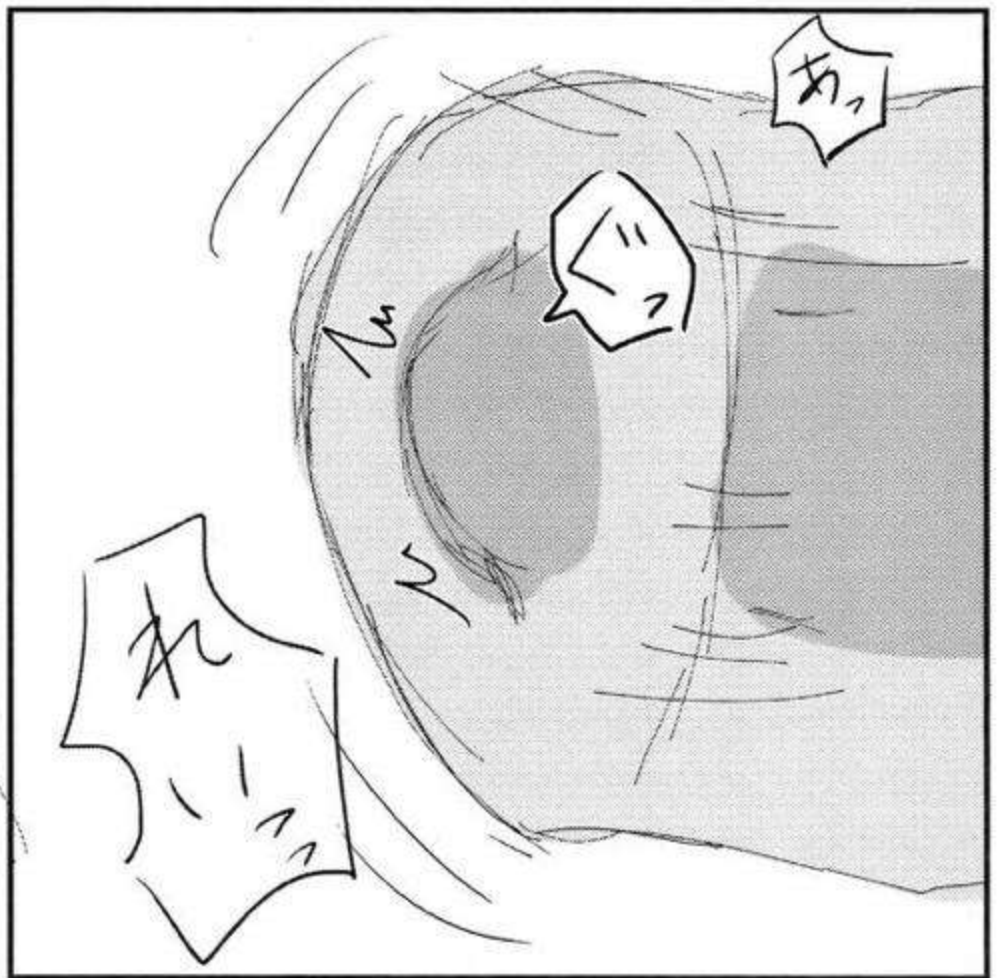
…ん、レイ…  
あたしも…

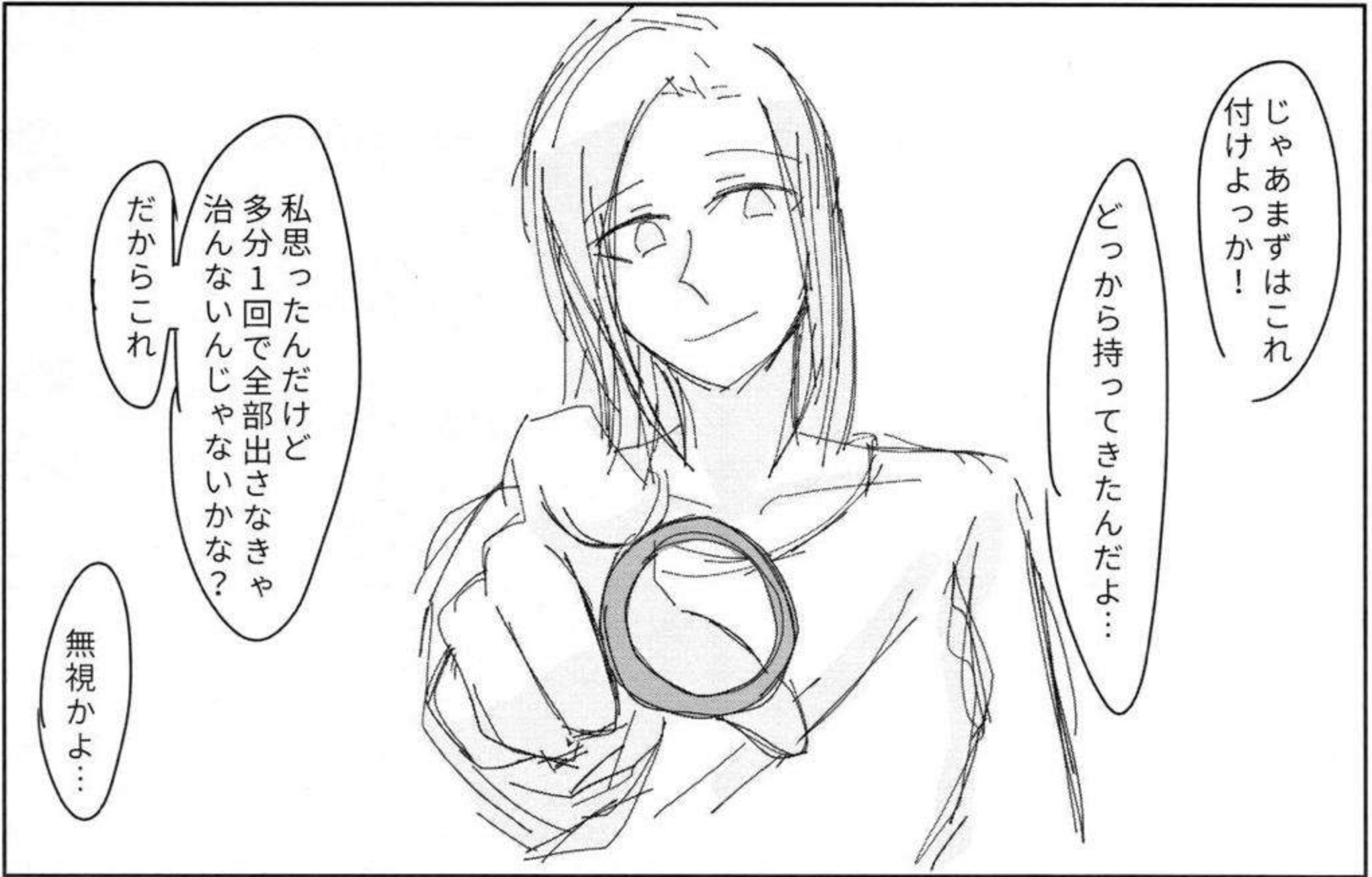
ねえ、もう1回  
シていい？

…ばか！



# Teasing





じゃあまずはこれ  
付けよっか!

どっから持ってきたんだよ…

私思ったんだけど  
多分1回で全部出さなきゃ  
治らないんじゃないかな?

だからこれ

無視かよ…



それ、この間か

いいからほら!

うわっやめろ…!

んっ  
それ、治したいんでしょ?

……

返事は?

はい……











うっ……あ、?????  
なんだ……これ?????



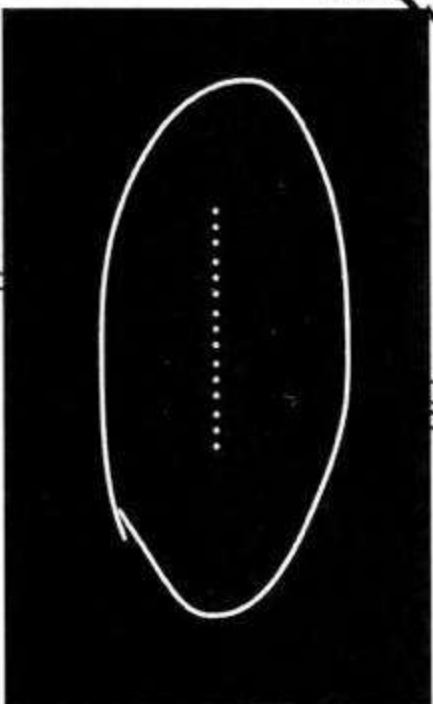
ほお  
フツッ



ふふ……ますきったら  
お漏らししてるみたい  
可愛い……



あ







## ♥みこと(小説)

【Twitter : @ThreeWords717】 【Pixiv : 41521323】

こんにちは、文字書き担当のみことです。

この度はすうさんとしゆうさんとの合同誌をお手に取って頂き有り難うございます！  
レイマスで初めて百合作品に触れた私がまさかふたなり作品を書く事になるとは  
思いませんでした(笑)

事前の打ち合わせで先天性でありレイに生やすというのを決めてから、そしてアニドリ  
3期8話を見てすぐに「温泉にしよう！」と思い書いてみましたが如何でしたでしょうか。  
他のお二人に比べたらプレイ内容的にはかなり普通なんです但其分描写を細かく、  
そしてますきを可愛く喘がせる事に力を注ぎました(笑)お気に召したら幸いです。  
女女でもふたなりでもレイマスはいいんです。何のシチュエーションでもイケる  
レイマスは至高のカップリングですね。これからも全力で推していきます！

## ♥しゆう(漫画)

【Twitter : @lks\_by】 【Pixiv : 20926937】

こんにちは。今回も参加させて頂きましたしゆうです。読んで頂きありがとうございます。  
ノリと勢いで決まったこのレイマスftnr合同まさか本当に本になるとは思わなかったです笑  
そして今回もお二方の作品がとともえっち！！

ftnrでも最高にハマるレイマス…どんどん推していきましょう！笑

## ♥すう(漫画/編集)

【Twitter : @thrylos\_su】 【Pixiv : 3389151】

まさかのふたなりレイマス本が爆誕してしまった…こんな事になるとは…笑  
元々男性向け同人は別のジャンルで結構描いてきたのですが、ふたなりという  
ジャンルを描くのは初めてです。奥が深い…。

普段描いているレイマス本では封印している男性向けっぽい描写も多く入れて  
みたり何かとはっちゃける事が出来て楽しかったです！

イケメンなのに皮被ってるますきと綺麗な顔してエグいちんちん持ってるレイ  
の概念は推せる！

最早レイマスならなんでも美味しいとすら思うので色々なレイマス本が読みたい  
なあと思うこの頃です。

お付き合い下さったしゆうさん、みことさんありがとうございました！

読んで下さった皆さんの何処かに刺さってくれたら嬉しいなと思います！



